

# フィリピン系ニューカマー第二世代の 学業達成と分岐要因

## — エスニック・アイデンティティの形成過程に注目して

額賀美紗子 *NUKAGA Misako* 三浦綾希子 *MIURA Akiko*

- 1 — 問題の所在
- 2 — 先行研究
- 3 — 研究の対象と方法
- 4 — フィリピン系第二世代が育つ家族の背景と社会的文脈
- 5 — 第二世代のエスニック・アイデンティティ形成と学業達成
- 6 — アイデンティティ分岐を促す構造的要因—エスニック・ネットワークと家族
- 7 — まとめと今後の課題

**【要旨】** 本論文は国内の移民研究において第二世代に関する調査がまだ稀少であることを背景に、フィリピン系第二世代のエスニック・アイデンティティ形成と学業達成が分岐する過程を明らかにする。26名を対象とした半構造化インタビューからは、エスニック・アイデンティティに関して①ホスト国志向型（メリトクラシー型と反/非社会型に分岐）、②出身国志向型、③ハイブリッド型という分岐パターンを抽出した。さらに反/非社会型と出身国志向型が低い学業達成に留まる一方、メリトクラシー型とハイブリッド型は高い学業達成を果たしていた。この分岐の背景にはエスニック・ネットワークと親の資本や家族構造、教育戦略の違いが見出せた。4パターンの中でハイブリッド型の若者が親子関係や学業達成の面で最も良好な状態にあり、ホスト国と出身国をまたいで多様なアクターとネットワークを築くことの重要性が示唆される。

### 1 — 問題の所在

2015年末時点で日本に住むフィリピン国籍所有者の総数は22万9595人で過去最高を更新し、中国、韓国・朝鮮に次いで3番目に大きいエスニック集団となっている（法務省2015）。その74%にあたる17万286人が女性であり、突出した女性割合の高さが在日フィリピン人の特徴である。背景には1980年代後半以降、興行ビザによって来日するフィリピン人女性が急増し、彼女たちの多くが日本で興行労働者として働く過程で日本人男性と結婚して家庭を築いていることが挙げられる。高畑（2016）によれば、この時代に結婚移民として来日した女性たちを在日フィリピン人の第一世代と捉えることができる。さらに2000年代からは戦前にフィリピンへ移住した日本人の子孫であるフィリピン日系人の来日と定住化が進んでおり、フィリピン系第一世代を構成する集団となっている。

本稿が対象とするフィリピン系第二世代とは、こうした第一世代を親に持つ子どもたちであり、現在多くが20代、30代の青年期・壮年期を迎えている。かれらは3つの集団に分類できる。まず、日比国際結婚夫婦のもとに生まれ、日本で育った者たちである。この子

どもたちは日本国籍となるため、外国人統計に実態が反映されず学業や就職において問題を抱えていたとしても把握することが難しい。次に、両親ともにフィリピン人だが母親が日本人と再婚したため「連れ子」として来日した者たちである。フィリピンで生まれ育ち、先に来日している母親を追って学齢期に渡日するケースが多く、厳密には1.5世と呼べる。最後に、日系フィリピン人の子どもである。この場合も両親ともにフィリピン人であることが多く、その数は日比国際結婚家庭に育つ子どもに比べてまだ圧倒的に少ない。

このように国籍やルーツ、生育環境という点でフィリピン系二世世代の中には多様性が見られる。そのため、二世世代の学業達成や地位達成についてもグループを単位としてのみ分析するのではなく、グループ内部の差異に配慮することが肝要である。国内の移民研究において二世世代に関する調査がまだ稀少であることを背景に、本論文ではフィリピン系二世世代内部の多様性に配慮しながら、かれらのエスニック・アイデンティティ形成と学業達成が分岐する過程を明らかにする。

## 2 — 先行研究

### 2.1 移民二世世代のエスニック・アイデンティティ形成と学業達成

1990年代以降、日本の学校に急増した外国にルーツを持つ子どもたちに関して、不就学や学習困難といった問題が明らかにされる一方（志水・清水 2001、宮島・太田 2005 ほか）、近年では学習意欲が高く、大学進学を志す者の出現が明らかにされている（広崎 2007、矢元 2016 ほか）。このことはマクロなデータによっても裏付けられている。国勢調査を分析した高谷ほか（2015）によれば、2000年から2010年にかけて外国籍の若者の高校在学率・大学進学率が上昇し、日本籍との学歴格差が縮小されてきている。これらの先行研究は、外国にルーツを持つ子どもたちの学業達成が分岐する傾向にあるということを示している。

学業・地位達成の分岐はホスト社会における移民二世世代の適応過程—特にエスニック・アイデンティティ形成—と関係していることがアメリカの研究蓄積の中で明らかにされてきた（Portes&Rumbaut 2001）。古典的同化理論に代わる分節的同化理論は、アメリカ社会が人種によって階層化されていることを背景に移民二世世代の若者たちのエスニック・アイデンティティが3つに分岐することを指摘した。従来の理論が提唱するように主流文化に同化して「アメリカ人」になる集団、主流文化を獲得しながらエスニック文化を維持し、「〇〇系アメリカ人」というハイブリッドなアイデンティティを形成する集団、そして都市下層マイノリティ文化に同化して「アメリカ人」になっていく集団である。前者二つの集団が教育達成を果たして上昇移動するのに対して、最後の集団は学校からドロップアウトして下降移動になるとされている。この理論では特に「選択的文化変容」を経てハイブリッドな「〇〇系アメリカ人」というアイデンティティを形成する過程が注目されている。強いエスニック紐帯を維持することによって都市下層の対抗文化への同化を免れ、エスニック・コミュニティの資源を利用しながら学業達成を果たすことが指摘されている。

一方、日本におけるニューカマー二世世代の研究はまだ端緒についたばかりであり、かれらのエスニック・アイデンティティや学業達成が複雑化する過程を分析した研究はまだ稀少である。ただし、フィリピン系二世世代については研究が散見される。例えば、高畑 (2016) は次世代へ民族文化や言語を継承する場所が家庭や教会以外にほとんどないことを指摘して、世代が下がるにつれてフィリピン系のアイデンティティは薄れ、日本人に同化していく可能性に言及している。一方、高畑 (2000)、三浦 (2015)、額賀 (2016) の研究では、二世世代の若者たちが教会への参加や家族内の継承、親族とのトランスナショナルな紐帯を通じてフィリピン文化を獲得し、エスニック・アイデンティティを形成していることが明らかにされている。また、高畑・原 (2014) は、フィリピン系 1.5 世の若者が日本社会に完全に同化するのではなく、フィリピンや第三国での大学進学や就労を将来展望とし、実際に日本を「通過点」として国際移動することを指摘する。これらの研究は、同化圧力が強いといわれる日本社会の中で、フィリピン系の若者たちの中には「日本人化」とは異なるライフコースを経験している者がいることを示唆するものである。ただし、こうしたアイデンティティ形成の分岐の在り様や、それがどのように学業達成へと結びついているかについてはまだ明らかにされていない。

## 2.2 エスニック・ネットワークの役割

Portes&Rumbaut (2001) によれば、二世世代のアイデンティティと学業達成の分岐は、第一世代が出身国から持ち込む人的資本のほかに、家族構造とホスト社会における編入様式によって影響される。編入様式とは具体的に、①移民集団に対する政府の受け入れ政策、②移民集団に対するホスト社会の差別、③移民のエスニック・コミュニティの有無とされている。特に③に関しては、制度的に完備されたエスニック・コミュニティが二世世代の若者たちを偏見や差別から守り、都市下層の文化への同化を防ぐことが示唆されている。アメリカの研究でもすべてのエスニック・コミュニティが制度的完備の状況にあるわけではないことが示されているが、この理論を日本社会に援用する際にもエスニック・コミュニティのあり方に注意を払う必要がある (永吉・中室 2012)。

広田 (2003) は近年の移民コミュニティが空間的な集住を伴う極端なかたちでの「エスニック・アンクレープ」を作らない傾向にあることを指摘し、「エスニック・ネットワーク」という視点から移民のアイデンティティ形成を明らかにすることを提起する。広田によればエスニック・ネットワークとは、「移民と移民を受け入れる地域住民 (=「共振者」) が形成する『関係の網の目』」であり、それは「つねに生成と「定着」と展開の過程」にある (広田 2003:13)。さらに、広田はトランスナショナルリズムの展開に触れ、そのネットワークは国内だけではなく移民の母国へとつながっていることを指摘している。すでに先行研究はエスニック・ネットワークがフィリピン系の若者のエスニック・アイデンティティ形成を促進することを明らかにしているが (三浦 2015, 額賀 2016)、さらなる事例の蓄積によって空間的な領域性を越えたエスニック・ネットワークがどのように二世世代に経験され、アイデ

ンティティの形成や学業達成に影響を及ぼしているのかを検討することが課題とされている。

以上の先行研究をもとに、本稿ではフィリピン系第二世代を対象にかれらのエスニック・アイデンティティ形成と学業達成が分岐する過程を探るため、次のリサーチクエスションについて明らかにする。

- (1)第一世代の編入様式、家族構造、人的資本はどのようなものか。
- (2)第二世代のエスニック・アイデンティティはどのように形成され、それは学業達成とどのような関係にあるのか。
- (3)エスニック・アイデンティティは、どのような要因によって分岐するのか。特にエスニック・ネットワークの在り方に注目する。

### 3— 研究の対象と方法

本稿で用いるデータは、日本社会で義務教育を経験し、現在10代後半から30代になるフィリピン系ニューカマー第二世代の若者26名に対するインタビュー調査である。移民世代を4つに分類したRumbaut (2002)によれば、本稿で対象となるのは幼少期に来日した1.5世と日比国際結婚によって生まれた2.5世であり、双方を含めて第二世代と呼ぶことにしたい。対象者のうち、日比国際結婚で生まれた者は16名、フィリピン人母の連れ子で実父がフィリピン人である者8名、両親ともフィリピン人の者が2名である。家族背景については第4節で詳しく述べる。対象者の詳細は表1に示した。

対象者にはスノーボール形式でアクセスし、家族関係、友人関係、教育経験、就労経験、フィリピンとのつながりなどについて1人2時間ほど半構造化インタビューを行った。許可を得て録音したものをスクリプト化し、それをデータとして用いる。インタビューは、2014年4月から2016年8月までに行われたものである。

### 4— フィリピン系第二世代が育つ家族の背景と社会的文脈

フィリピン系第一世代は、単身で移動したフィリピン人女性が日本人男性と知り合い、結婚して定住にいたるといった結婚移民のパターンが非常に多い点に特徴がある。本稿の対象者の場合、来日経緯が分かっている25名中22名の母親が結婚移民であり、日比国際結婚家庭を形成している。そのうち19名の母親がエンターテイナーとしての来日であり、1名の母親が農村花嫁、2名の母親がフィリピンの大学や職場を通じて日本人男性と出会い結婚したことによる来日であった。また2000年以降、戦前にフィリピンへ移住した日本人の子孫である日系人が増えているが(高畑2016)、本調査の対象者にも親が日系人であるという者が2名いる。さらに、日比国際結婚家庭では珍しいが、父親がフィリピン人で母親が日本人という事例も1名含む。

フィリピン人女性が来日した背景には、外貨獲得や失業問題の解消を目的としたフィリピンの国家主導の労働政策と労働力不足というプッシュ要因と共に、嫁不足の解消のために行われた日本の入国管理政策というプル要因がある。外国人の単純労働者は受け入れないという方針をとる日本政府はフィリピン人女性に「興行」ビザを発行して表向きは芸能活動を行う芸能人として受け入れたが、実際に彼女たちが従事したのはホステスの仕事であった。この結果、発展途上国出身の外国人にしばしば付与される「汚い」「貧しい」といったイメージに加え、「水商売」「性的に奔放」といったフィリピン人女性に対するステレオタイプが日本社会の中に形成された(笠間 2002)。こうした偏見と差別は第二世代のアイデンティティ形成に影響を与えていると考えられる。

結婚移民としての定住経緯によってフィリピン系ニューカマーに顕著にみられるのは国

表1 調査対象者のプロフィール

性別	年齢	生誕地 (来日年齢)	国籍	学歴	職業	使用可能言語	親学歴	父職業	母職業	エスニック・ アイデンティティ	
F1	女	24	日本	日本	大卒	外国人支援団体 サポーター等	日本語 タガログ語△	父：高卒 母：比大卒	自営	主婦	メリトクラシー型
F2	女	31	日本	日本	大卒	医療事務	日本語	不明	バンドマン	主婦	
F3	男	20	フィリピン (11歳)	フィリピン	大学在学中	大学在学中	日本語 タガログ語	父：比大卒 母：比大卒	工場勤務	工場勤務	
F4	男	24	日本	日本	高校中退	建設作業員	日本語	父：大卒 母：不明	会社経営	英会話講師	反/非社会型
F5	女	32	フィリピン (5歳)	日本	院卒	会社員	日本語 タガログ語	継父：大卒 母：比大卒	フリーター	語学教員	ハイブリッド型
F6	女	31	日本	日本	院卒	臨床心理士	日本語 英語	父：院卒 母：米院卒	大学教員	大学教員	
F7	男	27	日本	日本	院卒	高校教諭	日本語	父：高専卒 母：比大卒	不明	工場勤務	
F8	女	23	日本	日本	大卒	会社員	日本語 英語	父：高卒 母：比大卒	フリーター	ホステス	
F9	女	18	日本	日本	大学在学中	大学在学中	日本語 タガログ語△	父：大学中退 母：比大卒	会社経営	会社経営	
F10	男	18	日本	日本	大学在学中	大学在学中	日本語	父：高卒 母：比大卒	会社経営	主婦	
F11	女	24	日本	フィリピン	大学院在学中	日本語教師	日本語 英語	父：高卒 母：比高卒	不明	工場勤務	
F12	男	24	フィリピン (7歳)	フィリピン	大学院在学中	大学院在学中	日本語 タガログ語	不明	工場勤務	工場勤務	
F13	女	19	日本	日本	大学在学中	大学在学中	日本語	父：大卒 母：不明	不明	不明	
F14	男	24	日本	日本	大卒	アパレル店員	日本語 英語	父：大卒 母：不明	税理士	ALT	
F15	男	22	日本	フィリピン	大卒	大学院進学準備	日本語 タガログ語△	不明	会社経営	主婦	
F16	女	21	日本	フィリピン	高卒	飲食業	日本語 タガログ語	父：高卒 母：比大卒	会社員	通訳等	
F17	女	22	日本	日本	フィリピンの 大学中退	主婦	日本語 タガログ語△	父：高卒 母：比大卒	会社員	通訳等	
F18	女	23	日本	日本	大学院在学中	大学院在学中	日本語	父：高卒 母：比大卒	工場勤務	通訳等	
F19	女	18	フィリピン (10歳)	フィリピン	高校中退	介護士	日本語 タガログ語	継父：高卒 母：比高卒	会社員	自営	出身国型
F20	女	20	フィリピン (11歳)	フィリピン	高卒	母親の店手伝い	日本語 タガログ語	継父：高卒 母：比高卒	フリーター	自営	
F21	女	21	フィリピン (5歳)	フィリピン	中卒	事務員	日本語 タガログ語	継父：高卒 母：比高卒	フリーター	自営	
F22	女	20	フィリピン (4歳)	日本	高校中退	主婦	日本語 タガログ語	不明	不明	工場勤務	
F23	女	28	日本	フィリピン	フィリピンの 大学中退	主婦	日本語 タガログ語	不明	会社経営	水産加工 ホステス	
F24	女	25	日本	フィリピン	高卒	主婦	日本語 タガログ語△	不明	トラック 運転手	水産加工 ホステス	
F25	男	24	日本	日本	大卒	自営	日本語 タガログ語△	不明	(父不在)	不明	
F26	男	20	フィリピン (10歳)	日本	高卒	電気工事施工	日本語 タガログ語	不明	(父不在)	不明	

注：使用可能言語の△は、「簡単な会話であれば理解できる」を意味する。



際結婚という家族構造であり、そこではしばしば夫婦間の不均衡な権力関係が問題になる。今回の対象者のなかには、家父長的な家族の中でフィリピン人母が日本人父に従うということが当たり前だったと答える対象者が一定数存在した。こうした権力関係は二世世代への文化継承にも影響を及ぼす。本調査では12人がフィリピン人の親と幼少期からタガログ語で会話していたが、14人は日本語を家庭内で使用していた。その中には日本人の父親が「日本にいたのだから」とタガログ語の使用を禁じたと話す者もあり、夫婦間の権力関係が家庭内言語の決定や子どもの同化に影響を及ぼしていることがうかがえる。

一般的にニューカマーの学歴は低いことが指摘されるが、フィリピン系第一世代の女性たちの学歴は比較的高い。ホステスという日本では周辺化された仕事に従事する者たちでもフィリピン本国では高卒以上の中間層であることが多い(額賀2014)。今回の対象者の母親たちの場合は、高卒以上の者が多数で中には大学院卒の者もいた。一方でフィリピン人と国際結婚をする日本人男性の学歴は、高卒のブルーカラー層が多いとされる。2010年国勢調査を分析した高谷ほか(2015)によれば、日比国際結婚家庭において父親の7割以上が低収入就労か失業状態にある。本調査においては、父親の学歴ならびに職業は多岐に渡っており、有名大学卒で会社を営んでいる者もいれば、高卒で工場勤務などの低賃金労働に従事している者もいた。フィリピン系ニューカマーの場合、フィリピン人母がどのような日本人男性と結婚するかによって親の人的資本にはかなりの幅がでると言える。両親ともにフィリピン人である家庭に比べて、国際結婚家庭においては日本人の父親の存在によって主流文化の獲得が家庭内でサポートされやすい。

フィリピン人女性が国際結婚によって定住化していることはエスニック・コミュニティの形成にも影響を及ぼしている。フィリピン系ニューカマーの場合、日本人夫の家に嫁いで日本人に囲まれながら生活を行うフィリピン人女性が多いため、領域性があり、制度的に完備したコミュニティは形成されにくい(永田2011, 高畑2016)。ただし、教会や職場などでフィリピン人同士が出会い、その場を基点としてネットワークを構築することもある(三浦2015)。このため、在日フィリピン人は制度や人間関係が安定したエスニック・コミュニティという生活基盤を持つわけではなく、エスニック同胞が分散居住する中でネットワークを築きながら生活しているという見方が適切である。また、母国親族との間に維持するトランスナショナルなネットワークもフィリピン系にとって重要である。先行研究では、出稼ぎに出たフィリピン人が愛情とお金を母国親族に送り続けて「家族中心主義」の文化を維持し、「トランスナショナルな家族」を形成していることが明らかにされているが(Parreñas 2001)、今回の調査対象者の親たちの中にも、定期的な送金や連絡、頻繁な一時帰国といったトランスナショナル実践に従事し、国境を跨いで「家族のケア」をして家族紐帯を維持する様子が見られた(額賀2012, 2014)。二世世代はこのような日本とフィリピンに跨るエスニック・ネットワークの中で成長していると考えられる。

## 5 — 第二世代のエスニック・アイデンティティ形成と学業達成

26名のデータからフィリピン系第二世代のエスニック・アイデンティティパターンを4つに分類した。表2は各パターンの特徴をまとめたものである。メリトクラシー型と反/非社会型は日本社会への同化傾向が強く「日本人化」していく一方、出身国志向型はエスニック文化の維持が顕著であり、フィリピン人としての意識を強く持つ。ハイブリッド型はその中間に位置し、「日本人」と「フィリピン人」の狭間を生きる存在として自己規定する。以下では各パターンのエスニック・アイデンティティ形成過程と学業達成の関連性を説明する。

### 5.1 メリトクラシー型の若者たち

メリトクラシー型の若者たちに特徴的なのは、教育を通じて地位達成するという日本社会のメリトクラシー的価値観を内面化して主流文化に同化し、「日本人」としてのアイデンティティを形成していることである。日本語を話し、日本人としてふるまう一方で、エスニック文化の実践には消極的で、フィリピン人との親との関係は疎遠である。一方、日本人の親との関係は緊密であり、向学校的な仲間集団と関係を築くことで学習意欲を維持し、学校内外の教育リソースを利用して学業達成を果たす。このパターンに該当する3名

表2 フィリピン系第二世代の若者のエスニック・アイデンティティ類型<sup>1)</sup>

	ホスト国志向型		出身国志向型 (8名)	ハイブリッド型 (14名)
	メリトクラシー型 (3名)	反/非社会型 (1名)		
エスニック・アイデンティティ	*エスニックルーツの忌避  「日本人」 「日本人になりたい」	*エスニックルーツに対する意識希薄 *シンボリック・エスニシティ  「日本人」	*エスニックプライド *対抗的エスニシティ  「フィリピン人」 「ハーフ」	*フレキシブルな自己規定  「ハーフ」 「ダブル」 「ミックス」 「ジャバニーズフィリピーノ」 「フィリピーノジャバニーズ」
親からの文化継承	継承拒否	消極的	選択的	包括的
言語	日本語 タガログ語 (ゼロ～流暢)	日本語のみ	日本語 タガログ語 (流暢)	日本語 タガログ語 (限定的～流暢) 英語
母国滞在	親との滞在 (短期のみ)	親との滞在 (短期のみ)	親との滞在 親を伴わない長期滞在・留学・就活	親との滞在 親を伴わない長期滞在・留学
学業達成	高い (大学在学中～大卒)	低い (高校中退)	低い (中卒～大学中退)	高い (高卒1名、大学中退1名、他は全員大学在学中～大学院卒)

は全員が大学進学している。

3名は日本人であることが幼少期から自然であったパターンと、日本人になろうと努力を続けてきたパターンに分類できる。外見や日本語力の不足によってより深い疎外感を学校の中で抱いていたF1（フィリピン人の母と日本人の父）とF3（両親ともにフィリピン人）は後者に該当するが、かれらは学齢期からエスニック文化に対して強い拒絶の姿勢を示していた。「日本人になりたくて……混血児だったのがすごく嫌。(F1)」「フィリピンのこと勉強して何がいいですか？ フィリピン人、なにもいいことない。俺は日本に生まれて日本人になりたかったです。(F3)」といった語りからは日本社会におけるフィリピン人への偏見をかれらが内面化し、フィリピンルーツを持つことに対して劣等感を抱いていることがわかる。かれらはフィリピンを「貧しい」「汚い」「危険」などと表していたが、自らのルーツに対するこうした否定的な意識がかれらの「日本人化」志向へとつながっていた。

かれらが日本人化していく実践として顕著なのは、フィリピン人の親に対して距離を置くという行動である。若者たちにとってフィリピン人の親は劣位にあるフィリピン文化を象徴する「恥ずかしい」存在であった。特にF1とF3は、フィリピン人の親の日本語力の不足、日本的慣習に対する無理解、特に学校制度に関する知識の乏しさに関して憤りや反発をインタビューの中であらわにした。こうした関係性の中ではフィリピン文化の親子間継承が妨げられている。その一方、国際結婚家庭に育つF1とF2は日本人の親と親密な関係を築く様子がみられた。

日本人化の過程においてももう一つ顕著なのは、かれらが学校の日本人教師や向学校的な日本人仲間集団<sup>2)</sup>との関わりを強く持っているということである。かれらは教師に敬意を払い、成績を気にする態度をみせ、大学進学したいという強い意志を持っていた。そのような学習意欲を支えたのが部活動を通じた仲間集団である。学習意欲が高く、部活動に参加する生徒は学校のメリトクラシー的価値観に適応的であることが明らかにされている(西島 2002 ほか)。F3は中学時代に学習や友達との関係に困難を覚え、不登校に陥るが、定時制高校に進学後は「リセットしたい」と言って真面目に学校に通い、特に卓球部での活動に打ち込んだ。彼の高校は低ランク校で生徒の学習意欲は全体的に低く、反学校文化を形成する仲間集団が主流であったが、彼は生徒会や部活動を拠点にしながらそこで学校のルールやメリトクラシー的価値観に順応的な友人と関係を築いていた。

メリトクラシー型の若者が築く日本人の親、日本の学校における教師や向学校的な仲間集団との親密な関係はかれらが学業達成を果たす上で重要な社会関係資本となり、教育リソースへのアクセスを可能にしていた。しかし、それは一方でエスニックルーツの喪失やフィリピン人の親との確執という事態を伴い、かれらの中に心理的葛藤を生みだしていた。

## 5.2 反／非社会型の若者たち

反／非社会型に該当するのは、F4のみである。フィリピン人としての意識は薄く、「日本人」として日本社会の下位層に同化していく傾向にある。学力低位層に位置づけられる日



本人と親しい関係を築き、学校文化に対して批判的な見方や逸脱的な態度を示す。反社会型が反学校的な仲間集団と関係を形成して学校の価値規範を強く否定するのに対して、非社会型の若者は不就学や引きこもりの態度をみせることを特徴とする。本調査において非社会型の若者は見当たらなかったが、インタビュー対象者の兄弟には中学時代不登校に陥って自室に閉じこもるなど、非社会型に該当する若者が1名いた。反／非社会型の若者は「日本人化」していく上に反学校的な仲間集団を構成したり、家にひきこもるため、調査対象者としてアクセスしにくいのが現状であるが、潜在的該当者はさらにいると思われる。

反社会型に該当するF4はカタカナの名前以外、自分がフィリピンとつながっているという証は「ほとんどない」と述べ、「フィリピン人らしさ」が欠如している自分はインタビュー対象者として適当ではないのではないかと申し出てきたほどフィリピン系としてのアイデンティティが希薄である。その背景には、家庭の中でフィリピンとのつながりを意識する機会が限られていたこと、かつ母子関係が緊密ではなかったことがある。彼がインタビューの中でしきりに言及するのは、母親のトランスナショナル実践に否定的な日本人の父親とのエピソードであり、母親とのエピソードはわずかであった。父親との関係を強固にするなか、母親からのエスニック文化の継承が退けられるという家庭内のジェンダー構造の影響が示唆される。

F4が日本人化していく過程には、反学校的な仲間集団との強い繋がりが影響を与えている。小学校の頃から勉強が嫌いだったというF4は、中学に入ると、不良グループとつるむようになったという。定時制高校に進学するものの、当時付き合っていた彼女が妊娠したことを契機に高校を中退し、友人の紹介で建設作業員の仕事に就いている。準拠集団である不良グループの中では学業達成することに意味は見出されず、強いこと、かっこいいことが最優先とされる。この文脈においてエスニシティは個性の発露のような象徴的な価値を付与され、それ以外は生活に大きな影響を与えない (Gans 1979)。F4の場合、高校時代の経験を契機にカタカナの名前を肯定的に捉え返し、現在趣味でやっている格闘技ではカタカナの名前をリングネームにし、「かっこよさ」を演出しようとしている。かれらは自分の出自を「かっこよさ」や「おしゃれさ」を演出するための象徴的なものとして使う。特に昨今の「ハーフブーム」の影響はその効果を高めている。

反／非社会型の若者たちは家族や仲間集団の影響によって学業から早期に離脱する。F4の場合、父親は会社を営んでおり社会経済的地位は高い方だが、学校の勉強に関して厳しく言われた記憶はないという。フィリピン人の母親の教育期待は高かったというが、具体的な教育支援を受けることはなかった。親の人的資本が高くても、親が積極的に教育に関わることをしない場合には、子どもの学業達成は促されないことが指摘されているがF4もそれに該当する (宮島 2002)。F4の周囲に大学進学した者はいない。彼は地元の友人のツテで就職しており、その過程は日本人のノンエリート青年が孤立に抗うための手段として多様な関係資源を利用しながら非熟練労働に就く状況と重なる (中西 2009)。反／非社会型の若者の場合、フィリピン系であることは後景に退き、かれらが同化していく日本人の

下位層若者と同様の問題を抱えているといえる。

### 5.3 出身国志向型の若者たち

出身国志向型の若者に特徴的なのはインタビューにおいて自分がフィリピン人であるという意識を明確に呈示し、フィリピンへの愛着を強く表明した点である。かれらはタガログ語会話に堪能で、フィリピン文化に関する知識を持ち、フィリピンの親族との関わりも深い。このグループに該当する若者8名のうち5名はフィリピンで生まれ、幼少期に来日した1.5世であった。「自分を何人だと思えますか？」という質問に対して、彼女たちは即座に「フィリピン人」と答え、その際には両親がフィリピン人であり、フィリピン人の血統に生まれた点が強調された。

また、この若者たちは4パターンの中で最もフィリピンにいる親族との結びつきが強く、母国訪問をはじめとするトランスナショナルな実践を活発に行っていた。かれらはフィリピンの親族と強い結びつきを親世代から引き継ぎ、成長するにしたがって自ら母国親族とメールやSNSを通じて頻りに連絡を取り合い、中には親族を頼って高校や大学段階でフィリピンに留学したり（F23、F24）、就職活動したりする行動（F21）もみられた。母親が行う「家族ケア」を継承し<sup>3)</sup>、自ら稼いだお金を親族に送った経験がある者も8名中6名いた。インタビューの中で一様に「フィリピンに帰る」「帰りたい」という表現を使用することからも、かれらがフィリピンを自分のルーツがある「故郷」とみなして強い愛着を持っていることが明らかである。

このパターンの若者たちに特徴的なのはフィリピン人の母親との関係が緊密であり、その関係性の中でフィリピン文化が母から子へと包括的に継承され、強いフィリピン人意識の形成へとつながっている点である。フィリピン文化の特徴のひとつに家族中心主義が挙げられるが（Parreñas 2001）、インタビューの中では「フィリピン人は家族を大切にする」という言葉がたびたび語られた。

Portes&Rumbaut（2001）は差別や偏見の中で自らのプライドを守るために強化されるエスニック・アイデンティティを対抗的エスニシティと名付けているが、出身国志向型の若者たちにも同様のアイデンティティ形成を見出せる。エスニックプライドを守るために重要な役割を果たしたのが仲間集団である。インタビューからは、①エスニック同胞集団、②日本人の下位集団との強い結束が明らかとなった。

エスニック同胞集団との強い繋がりは出身国志向型の若者たち全員に見出された。かれらは学校、外国人向け学習支援教室、職場、教会、また親のネットワークを通じて同じような境遇のフィリピン系の人々に出会い、さらに紹介によってネットワークを広げていていた。たとえば、F20は中学生の頃から週に数回、同年代のフィリピン人と放課後や週末にカラオケや公園、自宅で集まるようになった。かれらはA地域の名前を取って「Aファミリー」と名乗り、そのメンバーの多くは日本語力の不足や学力不振の問題を抱え、日本の学校に居心地の悪さを感じている者たちだった。仲間内では飲酒、喫煙や学校をさぼ

ることが自明視されており、この仲間集団において共有されているのは学校の規律やメリトクラシー文化と矛盾するような反学校的な文化であった。

出身国志向型の若者たちの中には、日本人の仲間集団と親密な関係を築く者も見られた。F20の姉のF21は中学生の時に日本人の同級生と付き合うことになり、彼と彼の友人によってフィリピン人としてのアイデンティティを積極的に承認されるという経験を得る。F21はパートナーが、「差別とかせずに、何でも受け入れてくれるような感じ」の男性で、彼は「俺の彼女は外人なんだ」と誇らしげに語る、と話す。彼女は男性との付き合いを契機に、彼がリーダーとなっていた仲間集団の一員となるが、この仲間集団もまた反学校文化を形成している点が特徴である。彼女たちは学校をさぼり、喫煙や飲酒を行っていたため学校教師から問題視される存在となっていた。

出身国志向型の若者たちは上記のような反学校文化を形成する仲間集団に準拠することで、エスニック・アイデンティティの承認を得られる一方、学校を中心とするメリトクラシー的価値観から離れ、早い段階で学校教育から離脱して就労の世界に身を投じる。周囲には日本の学校制度において教育達成を果たしたロールモデルがおらず、かれらは学業に意味が見いだせない。学歴をみると、中卒1名、高校中退2名、高卒3名、フィリピンの大学中退1名、大卒1名となっており、全般的に低い。正規雇用されたF21を除いて皆アルバイトを転々とする生活を送っている。専業主婦となった3名のパートナーも職人やトラック運転手などで経済的に安定しているとはいえない。かれらは親世代よりも社会的に上昇することは見込めず、日本社会の下層にとどまることが予想される。

#### 5.4 ハイブリッド型の若者たち

ハイブリッド型の特徴は日本とフィリピン、二つの国に跨がったハイブリッドなアイデンティティを形成している点である。「ハーフ」「ダブル」「ミックス」「ジャパニーズ・フィリピーノ」など自らを表すために用いる呼称は様々だが、どちらか1つの国への帰属意識を強調しないというところは共通している。また、こうした呼称を用いつつも、その概念に一面的に規定されない、場面によって柔軟にアイデンティティを提示する点も特徴である。このパターンに該当する者は26名中14名と最も多い。このうち12名は日比国際結婚家庭出身の2世で、2名は実の両親ともフィリピン人である。

ハイブリッド型の若者たちはフィリピン人に付与されたスティグマを払拭することに最も積極的な姿勢を見せた。アメリカ社会では教育を通じて地位上昇したアジア系移民が「モデル・マイノリティ」として表象され、下層に留まるマイノリティ集団の「お手本」になるべきという圧力をアジア系移民自身が感じているとされるが (Takaki 1993)、こうした意識がハイブリッド型の若者たちにも見出せる。かれらは外国人として来日して低賃金で働く親の苦労や、在日フィリピン人が被る差別や偏見を知る中で、学業達成を成し遂げることで差別を払拭しようと試みていた。

そのため、ハイブリッド型の若者たちは学校文化に順応する態度を見せ、教師と親密な

信頼関係を築き、向学校的仲間集団と親しく付き合っていた。そして反学校的仲間集団とは距離を保ち、そこに加わるフィリピン系の若者とは関わらない姿勢を貫いていた。父が企業研修でフィリピンを訪れたときに母と出会い結婚したF18は、エンターテイナー出身の母親を持つ同級生たちが学校で問題行動をおこして教師に良く思われていないことに触れ、「私はあの子たちと一緒にではなくて良かったというのはありますね」と、「問題のある」フィリピン系の子たちとは関わらなかったことを話した。こうした態度の形成にはフィリピン人の母親からの忠告が影響している。

このようにハイブリッド型の若者たちはメリトクラシー型と同様に日本社会の主流文化に迎合する態度を示し、その結果として学業達成を果たしている。かれらの学歴は大学院卒3名、大学院在学中3名、大卒3名、大学在学中3名、フィリピンの大学中退1名、高卒1名であり比較的高い。メリトクラシー型と異なるのは、ハイブリッド型の若者が明確に「マイノリティ」という意識を持って自らのエスニック文化やトランスナショナルな紐帯の獲得・維持に努め、それを学業達成・地位達成の資源として道具的に利用している点である。

具体的な利用法のひとつは、フィリピンにいる親族を頼った留学や母国滞在である。母国滞在の経験は自らのフィリピンルーツを認識し、それを肯定的に捉える契機となっただけではなく、不登校からのリセットや、英語や国際的経験の獲得を通じた進学、就職の機会拡大につながっていた。たとえば、F17は中学時代にいじめを受けていたが日本の高校に進学するのが「怖い」のでフィリピンの高校に留学し、そのまま大学に進んだ。その妹のF16は、「頭が悪すぎて（日本の高校で）行くところがなかった」と話し、姉の後を追ってフィリピンの高校に留学した。二人の最終学歴はそれぞれフィリピンの大学中退と日本の高卒とであるが、日本に留まっていたら高校進学すら危うかったことを考えるとフィリピンとの紐帯が学業継続に貢献したといえる。

大学進学や就職のためにより戦略的にエスニックルーツやフィリピンとの紐帯を利用した者たちもいる。F8とF12は自分の「ハーフ」の背景を利用して大学受験に成功したと話す。両者とも推薦入試で上位ランクの大学に合格しているが、面接ではフィリピンの出自を明らかにして「異文化理解力」や「国際的な視野」があることをアピールした。さらにF8は新卒で国内上場企業の国際部に就職したが、面接の際には国際関係や英語力に秀でた大学を卒業したことや、「アジアで頑張っていきたい」という意思を伝えたという。彼女たちは「グローバル人材」を求める日本の大学や企業において、「ハーフ」というラベルや、自身のフィリピンの繋がりや経験を「国際的な資質」として戦略的に利用することの効用にきわめて自覚的である。

以上のような自己実現と同時に、このパターンの若者たちに特徴的なのはマイノリティとして社会貢献し、特にフィリピン人や在日フィリピン人の地位向上に寄与したいという意欲や行動である。その活動はフィリピンの開発援助、在日フィリピン人の子どもの学習支援、日比間の移動や人的交流の支援など多岐にわたる。このようにハイブリッド型の若



者たちの中には大学進学を通じて地位達成し、ミドルクラスの安定した生活を得る中で、フィリピン社会の貧困や在日フィリピン系の生きづらさを改善しようとする志向を持つ者があらわれている。

## 6— アイデンティティ分岐を促す構造的要因—エスニック・ネットワークと家族

以上、フィリピン系第二世代の若者たちのアイデンティティ類型を明らかにしてきたが、その分岐を促す構造的要因についてエスニック・ネットワークと家族に注目しながら4類型を比較検討してみたい。

表3にアイデンティティ類型ごとのネットワークをまとめた。まず同じ「日本人化」の過程を進むホスト国志向型においても、メリトクラシー型と反／非社会型ではネットワークのありかたが異なる。メリトクラシー型は日本人の親との良好な関係および、教師や向学校仲間集団との紐帯を通じて日本の学校文化に順応する一方、反／非社会型は親とも教師とも関係が弱く、準拠集団となるのは反学校的な仲間集団に限られる。

出身国志向型の若者に顕著なのはフィリピン人の親や親族との結びつきの強さである。その一方で日本人の親や日本人教師との間の関係性が弱い。偏見や差別に直面したときにかれらが頼りにするのはフィリピン人の親、親族、友人または、ルーツに寛容な態度を示してくれる反学校的な（日本人）仲間集団である。分節的同化理論ではエスニック・コミュニティが反学校的な仲間集団への同化を妨げると指摘されているが、出身国志向型の若者たちをとりまくエスニック・ネットワークは子どもの学業達成を支える価値観や人材が不足しており、反学校的な仲間集団への参入を妨げる効果を持っていなかった。そこではメリトクラシー的価値よりも就労して賃金を稼ぐということに価値を見出す文化が浸透しており、このネットワークを通じて若者たちは水商売や職人といった低賃金労働へのアクセスが容易になっていた。

ハイブリッド型の若者たちについては様々なアクターと緊密なネットワークが築かれていることが特徴である。かれらは日本人の親や教師、向学校的な仲間集団と関係を強く持つことで日本の学校に順応する一方、フィリピン人の親や親族とも良好な関係を通じて「フィリピン系」としてのアイデンティティを形成していた。出身国志向型とは異なり、ハ

表3 フィリピン系ニューカマー第二世代のエスニック・ネットワーク

		日本人親	フィリピン人親	フィリピン人親族	学校・学習塾・支援教室の教師	仲間集団		学業達成
						向学校	反学校	
ホスト国志向型	メリトクラシー型	○	×	×	○	○	×	高い
	反／非社会型	×	×	×	×	×	○	低い
出身国志向型		×	○	○	×	×	○	低い
ハイブリッド型		○	○	○	○	○	×	高い

\*○：つながり強い ×：弱い



イブリッド型の若者たちのエスニック・ネットワークはメリトクラシー的価値を強く支持するという点で日本の主流文化と親和的である。このパターンの若者たちは、国籍やトランスナショナルなネットワークの中で獲得した言語や国際的経験といったエスニシティを道具的に活用して大学進学や就職、自己実現を達成していることが特徴的である。

こうしたエスニック・ネットワークは、親の資本と家族構造、教育戦略によって影響を受けている。親の学歴や収入、家族構造という点で最も不利な立場にあるのは出身国志向型の若者たちであった。8名中、2名は両親が離婚して母子家庭に育ち、6名は皆共働きで工場作業員、水産加工員、トラック運転手、ホステスなど長時間低賃金労働や、レストランや運送会社の自営、フリーターなど不安定な仕事に就いていた。母親たちは全員がエンターテイナーとして来日して日本社会からの差別や偏見を強く感じており、子どもの学校を拠点とするネットワークに参加することはなかった。むしろ仕事を通じて知り合ったフィリピン人と緊密なネットワークを築き、エスニック同胞だけで結束する傾向にあった。さらに、フィリピンの親族が経済的に厳しい状態にあり、母親が定期的を送金していたこともフィリピンの親族との紐帯を強めることになり、二世世代の子どもたちのネットワークに影響を与えていた。

一方、比較的家庭の資源に恵まれていたのがハイブリッド型の若者たちである。判明しているだけでも父親（継父含む）については大卒が3名、大学院卒が1名、母親についてはフィリピンの大学卒業が5名、アメリカの大学院卒が1名いる。収入が比較的高い専門職や会社経営者の親を持つ若者が5名おり、こうした親の人的・文化資本が子どもの教育達成を促していることが推測できる。一方で、ハイブリッド型の中には父親が高卒の者が6名、親が工場作業員やフリーターである者も6名おり、必ずしも学歴や収入が高いわけではない。その中で全員に共通していたのは親の教育戦略と日本社会への包摂の程度である。親たちは学歴にかかわらず、子どもの学習に関わる態度や行動を見せており、特に日本語や学校的知識のある日本人の父親が宿題を手伝ったり、通塾を促したり容認したり、大学進学を強く勧めるといった様子が顕著であった。また、親たちはフィリピンの親族との紐帯を維持すると同時に、日本社会と関係を築いていたことも特徴的である。母親たちは学校や教育機関を通じて日本人の「ママ友」を作り、通訳で学校に出入りするうちに教師と親しくなるなど、子どもを中心とした地域ネットワークを形成していた。この背景には、彼女たちの多くが大卒で教育的関心が高いことのほかに、日本社会の側に外国人を受容、支援、活用する価値観と制度があることを指摘できる。

メリトクラシー型と反／非社会型の両親の学歴や収入にはばらつきがみられたが、同化志向が強く、フィリピンの親族との紐帯維持や家庭内におけるフィリピン文化の継承に消極的であったことに共通点が見出せる。異なるのは日本人の親の教育的関与である。前者に該当する若者の日本人の親は大学進学を積極的にすすめ、宿題を手伝うなど学習支援を実際に行っていた。反／非社会型の親は自身が大卒であって子どもを放任する姿勢をみせていた。このような親の態度が子どものネットワークおよびアイデンティティ形成と学業

達成に影響を及ぼしていると考えられる。

## 7— まとめと今後の課題

本稿では、ニューカマー二世世代のエスニック・アイデンティティ形成と学業達成が分岐傾向にあることと、その背景にはエスニック・ネットワークと親の資本や家族構造、教育戦略の違いがあることを明らかにした。フィリピン系二世世代の場合、メンバー同士が互いの子どもを監督するようなエスニック・コミュニティが不在のため日本人化が促され易い構造的な状況におかれている。本稿でとりあげたメリトクラシー型や反／非社会型の若者はこうした文脈においてエスニシティを失い日本社会に同化する方向に成長していた。しかし、ハイブリッド型の若者にみられるように、エスニック・ネットワークへの関わりを確保し、「ハーフ」「ダブル」「ミックス」「ジャパニーズ・フィリピーノ」といった用語を使って自己規定して「日本人」と「フィリピン人」の狭間を生きる者も見出された。

本稿で明らかになったのは、ハイブリッド型の若者が最も学校に適応的で学業達成が高く、親子関係も良好であるという点である。かれらは日比両方の社会の多様なアクターと緊密なネットワークを築いており、そのことが両文化の獲得につながっている。バイリンガル・バイカルチュラルな能力が高い学業達成につながることは分節的同化理論によっても示されているが、在日フィリピン系の事例においても同様の結果が確認された。また、ハイブリッドなアイデンティティを形成することは、学業達成だけではなく、自己肯定感や良好な親子関係の形成、差別や偏見に対する積極的抵抗や日比社会の懸け橋としての社会貢献への意欲を促進していた。

このようにハイブリッドなアイデンティティを形成して学業達成をしていく一方、出身国志向型の若者たちの事例が示すように、エスニック・ネットワークが過剰に強く、ホスト社会の主流文化とのつながりを形成できない場合、「外国人」として排除され、学業から早期に離脱して不安定な就労状態に陥りやすいことが指摘できる。現在の日本は平等な教育機会が全員に与えられない「排除型社会」となっていることが指摘されているが（酒井2015）、出身国志向型の若者たちは学校教師や向学校的仲間集団と関係が築けず、学校文化や教育達成のための資源を獲得できない状況におかれていた。

同化圧力のもとでエスニシティを失って日本人化していくのでも、「外国人」として排除されるのでもなく、ハイブリッドなアイデンティティを形成して学業達成を果たしていくためには何が必要なのであろうか。分節的同化理論ではエスニック・コミュニティの重要性が示唆されていた。しかし日本にはアメリカ社会に比べて制度的に完備されたエスニック・コミュニティは少なく、フィリピン系のように分散居住する外国人も多い。そのため、日本と出身国双方の社会のアクターとどのようなネットワークを親子が築いていけるかがアイデンティティや学業達成に重要な影響を及ぼす。本稿では学校教師や学習支援団体、向学校的仲間集団とネットワークの重要性を示唆した。ただし、その詳細なプロセスにつ

いては十分に検討することができなかつたため、この点については今後の課題として検討を行っていききたい。

本稿で明らかにした4類型が他のニューカマー集団に適応できるかについても今後の検討課題である。本調査ではハイブリッド型の者が多く、フィリピン系全体として同様のことがいえるかは今後事例の蓄積が必要であるものの、他集団と比較してフィリピン系はハイブリッド型になりやすいと考えられる。その理由としてまず日本人の親がいる国際結婚家庭に育つ者が多いという点である。このため、他のエスニック集団に比べて家庭内における日本語の獲得が容易であり、主流文化との接点を築きやすい。二点目として、第一世代が活発なトランスナショナル実践に従事しており、そのために第二世代もフィリピン文化を獲得する機会が多く与えられているという点である。以上の点について、他のニューカマー集団との比較検討によって本稿で示した分岐モデルを精緻化し、エスニック集団間の相違を明らかにしていくことが重要である。

今回提示した第二世代のエスニック・アイデンティティの類型はあくまで調査段階のものであり、今後変化し得る可能性は多分にある点にも留意が必要である。日本人としての意識を強く持っていた者たちが様々な出来事を契機にフィリピン系としての自分を意識しだすという事例もある。かれらがライフコースの中でエスニック・アイデンティティをどのように変化させていくのか、継続的に見ていく必要があるだろう。

#### 〈注〉

- 1) 親からの文化継承の詳細については額賀(2016)を参照。
- 2) 向学校的な仲間集団とは学校や教師の価値規範に同調する生徒文化を共有する集団、反学校的な仲間集団とは上記価値規範から逸脱する生徒文化を共有する集団とする(竹内1995)。
- 3) 在日フィリピン系二世世代においては特に女子に「家族ケア」規範が受け継がれ、送金の慣習が再生産されることが示唆されている(額賀2014, 2016)。

#### 〈参考文献一覧〉

- Gans, H. 1979. "Symbolic Ethnicity: The Future of Ethnic Groups and Cultures in America." *Ethnic and Racial Studies* 2: 1-20.
- 広崎純子. 2007. 「進路多様校における中国系ニューカマー生徒の進路意識と進路選択: 支援活動の取り組みを通じたの変容過程」『教育社会学研究』80: 227-245.
- 広田康生. 2003. 『エスニシティと都市(新版)』有信堂.
- 法務省. 2015. 『在留外国人統計』  
[http://www.moj.go.jp/housei/toukei/toukei\\_ichiran\\_touroku.html](http://www.moj.go.jp/housei/toukei/toukei_ichiran_touroku.html). 2016年11月8日アクセス.
- 笠間千浪. 2002. 「ジェンダーからみた移民マイノリティの現在—ニューカマー外国人女性のカテゴリー化と象徴的支配」宮島喬・梶田孝道編『国際社会4マイノリティと社会構造』pp.121-148 東京大学出版会.
- 三浦綾希子. 2015. 『ニューカマーの子どもと移民コミュニティ—二世世代のエスニック・アイデンティティ』勁草書房.
- 宮島喬. 2002. 「就学とその挫折における文化資本と動機付けの問題」宮島喬・加納弘勝編『国際社会2変

- 容する日本社会と文化』pp.119-144 東京大学出版会。
- 宮島喬・太田晴雄. 2005. 『外国人の子どもと日本の教育—不就業問題と多文化共生の課題』東京大学出版会。
- 永田貴聖. 2011. 『トランスナショナル・フィリピン人の民族誌』ナカニシヤ出版。
- 永吉希久子・中室牧子. 2012. 「移民の子どもの教育に関する一考察—なぜ日本に住む移民の子どもの教育達成は困難なのか」『移動の時代を生きる—人・権力・コミュニティ』pp.43-90 東信堂。
- 中西新太郎. 2009. 「漂流者から航海者へ—ノンエリート青年の〈労働—生活〉経験を読み直す」中西新太郎・高山智樹編『ノンエリート青年の社会空間—働くこと、生きること、「大人になる」ということ』pp.1-45 大月書店。
- 西島央ほか. 2002. 「部活動を通してみる高校生活に関する社会学的研究—3 都県調査の分析をもとに」『東京大学大学院教育学研究科紀要』42 : 99-129。
- 額賀美紗子. 2012. 「トランスナショナルな家族の再編と教育意識—フィリピン系ニューカマーを事例に」『和光大学現代人間学部紀要』5 : 7-12。
- . 2014. 「フィリピン系ニューカマー生徒の学業達成に関する一考察—トランスナショナルな家族のケアの影響に注目して」『和光大学現代人間学部紀要』7 : 77-97。
- . 2016 「フィリピン系ニューカマー第二世代の親子関係と地位達成に関する一考察—エスニシティとジェンダーの交錯に注目して」『和光大学現代人間学部紀要』9 : 85-103。
- Parreñas, R. S. 2001. *Servants of Globalization: Women, Migration and Domestic Work*. Stanford, CA: Stanford University Press.
- Portes, A. and Rumbaut, R. G. 2001. *Legacies: The Story of the Immigrant Second Generation*. Berkeley: University of California Press.
- Rumbaut, R. G. 2002. “Served or Sustained Attachment? Language, Identity, and Imagined Communities in the Post-Immigrant Generation.” Pp.43-95 in *The Changing Face of Home: The Transnational Lives of the Second Generation*, edited by Levitt, P. and M.C.Waters. New York: Russell Sage Foundation.
- 酒井明. 2015. 「教育における包摂と排除」『教育社会学研究』96 : 5-24。
- 志水宏吉・清水睦美編. 2001. 『ニューカマーと教育—学校文化とエスニシティの葛藤をめぐって』明石書店。
- 高畑幸. 2000. 「バイカルチュラル・アイデンティティの構築に向けて—日比家族の第二世代の事例から」『市大社会学』1 : 24-36。
- . 2016. 「フィリピン系日本人—10万人の不可視的マイノリティ」駒井洋監修『マルチ・エスニック・ジャパニーズ—〇〇系日本人の変革力』pp.154-167 明石書店。
- 高畑幸・原めぐみ. 2014. 「在日フィリピン人の1.5世代：日本は定住地か、それとも通過点か」『国際関係・比較文化研究』13(1) : 21-39。
- Takaki, R. 1993. *A Different Mirror: A History of Multicultural America*. New York, Little Brown.
- 高谷幸・大曲由起子・樋口直人・鍛冶致・稲葉奈々子. 2015. 「2010年国勢調査にみる外国人の教育—外国人青少年の家庭背景・進学・結婚」『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』39 : 37-56。
- 竹内洋. 1995. 『日本のメリトクラシー—構造と心性』東京大学出版会。
- 矢元貴美. 2016. 「フィリピンにルーツを持つ子どもの大学・短期大学への進学理由—日本で高等学校を卒業した人たちの事例から」『移民政策研究』8 : 89-122。

附記：本研究は平成27年度科学研究費補助金（基盤研究(B)）「ニューカマー第二世代の義務教育卒業後のライフコースと次世代形成にかかわる総合的調査」(課題番号26285193 研究代表

者:角替弘規)による研究成果の一部である。インタビューについては職業能力開発大学校の坪田光平氏にご協力頂いた。深く感謝したい。

————— [ぬかが みさこ・和光大学現代人間学部心理教育学科准教授]

————— [みうら あきこ・中京大学国際教養学部准教授]